

おしゃべり通信

№. 252 R2. 11. 15 発行 如春会 浦田医院

新しい生活様式が今までの常識を変えた!? ～喘息患者数の変化から見えてきたもの～

「with コロナ」と言われ始めて約一年になります。
今までの当たり前が通用しない場面では、ストレスを感じることもあります。一方、新しい生活様式により私たちは以前よりも過ごしやすくなった部分も出てきました。



■激減した「喘息患者」

気管や肺に感染するウイルスは、一般に喘息を悪化させると知られています。新型コロナウイルスの発生を認識した当初、医療関係者の間では喘息の入院患者数が増加するのではないかと危惧されていましたが、実際には、患者数は「激減」しています。例年、春先から初夏にかけて喘息入院患者数は増加しますが、今年（2020年）はちょうど同時期に新型コロナウイルス感染予防が奨励され、結果、手洗いや手指消毒などの感染予防行動が当たり前になったこと、マスク着用によりアレルゲンへの暴露が減ったこと、患者が服薬を規定通りに行うように意識が向上したことなどから発作の誘発が食い止められたものと思われる。

喘息患者だけでなく、急性の発熱患者も激減しており、コロナ対策はすべての感染症の予防対策であることが証明された形になりました。

■現代のライフスタイルが感染の温床だった？

大人が「ホームステイ」を頑張っている間、保育所・幼稚園は自粛を要請されていたとはいえ、ほとんど通常運営されていましたが、子ども達の感染症も一律半以下になっています。感染の温床と考えられてきたこれらの施設に感染症をもちこんでいたのは、実は「大人社会」だったといえることができます。

園児たちの受診率の高さ（家庭保育児の3倍）は、大人が仕事をしやすくするための代償だったといえるでしょう。このコロナ禍をきっかけに現代では当たり前になっていた生活様式が社会全体でみると損失になっている側面はないか、見つめなおすことが必要かもしれませんね。

■本格的な冬が到来！必要なこととは・・・

空気が冷たくなり、乾燥がすすむ冬は例年インフルエンザやノロウイルスなど、さまざまな感染症が流行する季節です。新型コロナウイルス感染症に限らず、多くの感染症を予防するためにも感染予防行動を徹底して過ごしましょう。また、感染予防行動は“いわゆる風邪”をこじらせずに済むことがわかりましたね。「新しい生活様式」といわれますが、「風邪をひいたら、食ってねる」は実は太古の昔からなされてきた感染予防の基本中の基本。ちっとも「新しい」ではないのです。もう一度、基本を振り返り、実践していきましょう。少しでも体の不調を感じたら休息をとることや早めに病院受診を行う、規則的な生活を送る、栄養をしっかり摂るなどが大切です。



参考：東洋経済オンライン「新型コロナをめぐるデータベースの研究が想定外の結果を導き出した」（2020年11月5日）

監修：浦田章子 M.D.

文責：金柿

誹謗中傷や“犯人捜し” クラスター発生高校に起きたこととは



新型コロナウイルス感染症のクラスターと認定されると、公表をひかえることを希望する施設としっかり公表して情報を共有しようとする施設がでてきます。皆さんはどちらが合理的だと思いますか？現実には、感染拡大防止のための名称公表にも関わらず、そこに関わる人たちのプライバシーも人権への誹謗中傷が絶えません。

生徒・職員を含め 100 人以上のクラスターが発生した高校では、記者会見で関係者への人権尊重と個人情報の保護に理解と配慮を強く求めたにも関わらず、学校へのクレームの電話は鳴りやまなかったといいます。その内容は「日本から出ていけ」「学校をつぶしてくれ」といった極めて感情的なものもあったようです。



この事例で注目すべきことは、学校がこうしたクレーム対応に追われている間、最も大切にすべき生徒の健康観察や心のケアに遅れが出たことです。ネット上では、生徒の写真が出回り、“犯人捜し”が始まったり、自分の通っている学校が非難されたことにショックを受けた生徒がいたり、報道をみて「人が怖くなった」と精神的にショックが大きかった生徒もいたのです。

誰にも感染のリスクはあり、感染者を責めてはいけません。インフルエンザ同様、どんなに用心していてもいつかは自分も感染するのです。相手思いやる気持ちを持ち、冷静に行動したいものです。



参考：FNN プライムオンライン「誹謗中傷や“犯人捜し”

クラスター発生高校に何が起こったか」（2020年11月5日）

監修：浦田章子 M. D.

文責：金柿